

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

味志 優

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科国際社会科学専攻

【研究題目】

アフリカにおける汚職や「公」の概念のダイナミズム

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、サブサハラ・アフリカ(以下、アフリカ)諸国において、汚職やそれに関連する「公」の概念がいかなるダイナミズムを有しているかを明らかにしようとするものである。

汚職は、とりわけ経済開発を妨げるという観点から、アフリカ諸国において近年最も重要な問題の一つとして議論されてきた。アフリカにおいて汚職問題がいまだに収束を見せない背景として、先行研究では、アフリカ固有の「公」あるいは「公共」の概念が存在するという議論が行われてきた。つまり、一般的に汚職は「私的な利益のための、公的な職務の乱用」と定義されるのだが、先行研究によれば、そもそもこの定義における「公」ないし「私」の概念のあり方が西洋とアフリカ諸国の間で異なるのではないか、という議論が展開されてきた。

本研究はこうした先行研究をさらに発展させ、アフリカ諸国に固有な形で共有され続けているとされる「公」概念が、近年全世界的に展開される反汚職の政策によって変化の途上にあるのではないか(ダイナミズム)という点を探求するものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上記の研究目的を達成するために、関連する文献調査を行うとともに、タンザニアのバリアディ(Bariadi)県西部、バリアディ市近郊のB村で実地調査を行った。

タンザニアを選択した理由は、申請者が修士課程在籍時に行なった他の研究を通じて、同国の社会経済的事情に通じており、またスワヒリ語を一定程度習得しているため、現地調査を行いやすいためである。また、タンザニアにおける汚職の状況は他のアフリカ諸国と比べて特に特殊なものではなく、他国への示唆も得やすい。さらに、バリアディ県を選択した理由は、バリアディ県民は、汚職や公に関する議論や考察を行った経験が、他地域よりも比較的豊富であると考えられるからだ。その理由は、バリアディ県の選挙区から1995年の複数政党制選挙の再開当時から国会議員に当選し続けているチェンゲ(Andrew Chenge)にある。チェンゲは、2008年に汚職の関与を報じられて閣僚を辞任した経験があるのだが、その後彼は、汚職容疑に関する潔白さが曖昧な状況の中で、2010年の国政選挙においてこの選挙区で出馬し僅差で再当選し、その後も当選し続けている。そのため、バリアディ県の人々は、汚職容疑のある政治家に投票するか否かという判断を迫られた経験があり、汚職やそれに密接に関わる「公」の概念について、特にその概念や実践の西洋との差異やその状況の変化について、他の地域よりも調査が容易である。

具体的な研究実施のスケジュールとしては、1年の研究実施期間のうち、汚職に関してフィールドワークを用いた先行研究について、とりわけアフリカを対象にしたものをレビューした上で、2018年の2・3月、および6月から9月までの間に計約4ヶ月にわたって、バリアディ県B村でのフィールドワークを行った。

【結論・考察】(400字程度)

B村でのフィールドワークの結果、現段階において主に、①西洋と異なる公共領域のあり方、②その現代的な変容の発生、の2点を確認している。①については、例えば選挙の際に、候補者が有権者に対してビールや菓子の配布といった便宜を図ることで、自分への投票を約束させるといったことが広く行われている、と人々は語っていた。他方で、これは②の点に関係するのだが、こうした汚職行為が過去のものとして語られることも多かった。2015年の選挙によって誕生したマグフリ大統領の政権下においては、汚職が厳しく取り締まられていると村の多くの人々は信じているようである。汚職は、現在のマグフリ政権下においては、当然のように行われる行為ではもはやなくなっており、むしろ、見つければ厳しく罰せられる行為として認識され始めていると言える。

今後もさらに調査を継続し、この現代的な変化のあり方について、さらに深く検討する予定である。具体的には、こうした認識の変化はマグフリ政権下における締め付けに伴う一時的なものなのか、あるいは公共や法律に対する根本的な考え方そのものが変化し始めているのか、また、こうした変化に伴って人々の具体的な生活やその他の思考様式にどのような変化が生じているか、という点を詳しく探求していく予定である。